

松室元子様。 わざわぎの徳治様ご会葬御礼を戴き恐縮しております。 徳治様には大学在学中からずっと先輩友人として親しんできましたのにこんなに早く逝かれてしまい残念の極みであります。

徳治様とは忘れられない登山の思い出があります。 我々は徳治様を徳さんと呼んでました。 卒業の昭和33年3月初め、私、石松（機械科）と土屋（電気科）に徳さんから声がかかってきました。 卒業したら大きな山、雪と氷の山には簡単には行けなくなる。 登るなら今しかない。 徳さんも大学院卒業でした。

対象は北アルプス剣岳でした。 私は驚きました。 夏でも登ったことがなかったのです。 しかし徳さんは、君らは今まで他の山で経験しているから大丈夫だと説得され行くことにしたのです。

登山計画は全て徳さんが作ってくれました。 装備は各人の冬山装備、その他ザイル、冬用テント、食料は非常食含めて7日分、炊事用コンロ、燃料、各人のスキー等で各人の荷物は40kg以上はあったと思います。 当時の写真、細かい記録等探しましたが見つからず、私の記憶だけなので、土屋の記憶では登山は3月中旬から月末ぐらいの間で帰京の翌日が卒業式だった様です。

当時は冬の剣岳に登るには夜行列車で富山に到着き、富山電鉄（今の富山地方鉄道立山線）で剣岳・立山等の登り口の栗巣野（あわすの：現在は**たてやま**と改名されている）駅まで行くはずでした。 夜行列車で富山に着いた我々は、栗巣野行きの電車にりましたが、雪が多くて富山電鉄の除雪が間に合わず、我々は途中で降ろされ膝まで潜る雪の線路を荷物を担いだまま歩くことになり3時間ほど歩いてやっと昼に栗巣野駅に到着し駅前の旅館にはいれました。

（今では、長野県側の黒四ダムを渡りゴンドラとトンネルトロリーバスで冬でも立山の富山県側に抜け、雪の状況次第では剣岳の登山基地となる雷鳥荘迄スキーで滑って行けますが、当時は長野県側から黒部川に繋がるためのトンネルを針ノ木峠の下に掘っている頃でした。）

旅館のそばには登山用1400mのトンネルケーブルカーがあるのですが冬の間は休眠です。

1日目はこの宿に泊まりますが、二日目に備えて貴重品以外の荷物、スキー等を背負い、トンネルになっているケーブルの階段を登り、出口の陰に置いてきました。この日以降、我々が下山するまで登山者に会うことはありませんでした。

二日目の早朝、宿に別れを告げ、登山基地となる雷鳥荘に向かいます。トンネルの階段を上り前日に揚げてあった荷を背負い、スキーを付けて歩き始めました。この辺は美女平と言われ森の中ですが斜度も緩く暫く行くと視界も広がり幸い天候は時々晴れぐらいでシールを付けたスキーはあまり潜らず快適でした。只、山小屋雷鳥荘迄は夏でも歩くと約10時間かかるのです（現在夏はバスあり）。12時を過ぎ、弥陀ヶ原と呼ばれる広い斜面に入る頃から雪が降り始め、視界が悪くなりました。現在はこの周辺にはホテル、山小屋、国民宿舎迄ありますが、当時は美女平の上の方に小さな山小屋が一つあっただけ、勿論冬は閉鎖でしたが、遭難防止のため窓から入れるようになっていました。天狗平を過ぎ斜度が少しきつくなったら温泉の蒸気が吹き出ている地獄谷の横の斜面を通過中雪が崩れて滑り落ちそうになり冷やっとなの覚えています。雷鳥荘は地獄谷から少し登ったところにあり薄暗くなる頃着きました。現在の雷鳥荘は立て替えてもう少し上にあり大きくなっています。雪深さは一階を埋めつくし、二階の小さな窓がやっと見えました。徳さんがあ

らかじめ小屋の持ち主と連絡を取り、入居の許可を取ってあり、二階の非常用の開けられる窓から入りました。

小屋の中は冷え切っていて小屋の中にテントを張り、やっと落ち着きました。食事は何を食べたか全く覚えていません。コンロを持って行ってるので朝晩は米のご飯と味噌汁で、昼は乾パンとジャムだったと思います（山岳部の食事）。

三日目、小屋到着の二日目は雪の状況や登山ルートの確認のため雷鳥沢をスキーで少し登ってからスキーを外し左の尾根を登り剣御前小屋のある別山乗越（ノッコシ：峠のこと）迄3時間ほどで上がりました。天候は小雪で視界はせいぜい100mぐらいで剣岳は全く見えませんでした。さしあたり雪の状態は良さそうなので次の日の天候に期待して雷鳥荘にもどりました。

四日目の朝4時頃起き食事をして5時の薄暗い中を出発です。前日の別山乗越迄登り、ここから北に向かって雪と岩の細い稜線通しで剣岳の頂上を目指しました。天候は小雪、視界約50mです。ピッケル・アイゼンの完全装備で3人はザイルで繋がり石松と土屋が交代で先頭になり、徳さんが後ろからルートの指示を出しました。このルートは雪のない夏のルートと全く違い、積雪期の夏ルートは雪崩の巣になってしまうからです。別山乗越の標高は2792m、剣岳は2999mで差は207mしかありませんが、途中で小さいながら御前剣、一服剣、前剣、等の岩と氷の稜線の登り降りを繰り返さねばなりません。

徳さんの指示のお陰で丁度昼頃なんとか剣岳頂上に立つことができ、雪が降る中で頂上以外何も見えませんが感激と満足感でいっぱいでした。頂上には小さな祠があり、その近くには、赤く錆びた大きな青竜刀みたいな刀が石で囲まれ立っていました。余談ですが私は会社をリタイヤした後、夏に二度剣岳に登りましたが刀はありませんでした。自分の昔を壊されたような気がしています。昼食を何処で取ったか記憶は有りませんが頂上には長くいたと思います。下りはザイルを着けたまま別山乗越の峠まで登ったコースをそのまま下り、そこでザイルを解いて雷鳥荘に戻ってきました。夕方の5時を過ぎていたと思います。

小屋の窓が開いていて誰かが入った気配がします。出てきたのは二人の小屋番で、春からのオープンに備え小屋の整備に上がって来ていたのです。この小屋には本来地獄谷からの温泉が内湯として引かれています。この日にはまだ入れなかったと思います。

小屋の二階でのテント生活も明日の下山までで、夜更けまで今日の稜線での動きと感動を語り合いました。

五日目、下山日の天候は曇りぐらいだったと思います。日が高く上がった頃、忙しい作業をしている小屋番に別れを告げ、スキーを付け、地獄谷、弥陀ヶ原、を経て麓のロープウェイ上の美女平までのんびり滑り、例のトンネル内の階段を下って栗巢野駅前の旅館に到着したのは昼を大きく過ぎていました。今日はこの宿でゆっくり休み明日帰京予定です。温かい風呂で垢を落とし、おいしい夕食で腹を満たしました。

六日目、朝、宿に別れを告げ、未だに除雪されていない線路を3時間ほどかけて歩き途中の駅から電車に乗り富山駅に出ました。3人共、駅でます寿司を二箱買い、一箱は昼食、他の一箱は土産でした。

徳さん..... ありがとうございます！

石松隆夫